

第 24 回 大学入試のあり方に関する検討会議について

2021 年 4 月 2 日に大学入試のあり方に関する検討会議が開催された。

16:00 から 18:00 までの予定で、文部科学省 3F1 特別会議室で行われた。

今回も前回に引き続きコロナウイルス感染拡大防止で傍聴者は認められず、ライブ配信での中継となった。100~120 人ほどが視聴していた。

今回の議題は以下の通りである。

1. 「大学入学者選抜における多面的な評価の在り方に関する協力者会議」審議のまとめについて
2. 平成 30 年告示高等学校学習指導要領に対応した令和 7 年度大学入学共通テストからの出題教科・科目に関する大学入試センター発表について
3. 記述式問題の出題のあり方について

今回も前回に引き続き WEB 会議方式で行われ、文科省の会議室からは三島座長と川嶋委員が、その他の委員はネットを経由して参加した。事務局からは荒瀬委員が欠席、萩原委員が途中からの出席、益戸委員、末富委員、吉田委員が途中で退席予定であることが告げられた。萩生田大臣は今回、参加していなかった。

まず、議題 1 について資料 1 に基づいて協力者会議の主査である圓月氏より説明があった。

「大学入学者選抜における多面的な評価の在り方に関する協力者会議」は 2020 年 3 月より 2021 年 3 月まで 12 回開催され、3 月 31 日に審議のまとめが公表された。この会議では「学力の 3 要素の多面的・総合的な評価のあり方について」と「新学習指導要領下での調査書のあり方及びその電子化のあり方について」の 2 点が主に議論された。

審議のまとめでは、主体性の評価にあたっては知識・技能や思考力・判断力・表現力等と合わせて多面的・総合的に評価すること、学校外の活動については本人が直接書類を提出すること、経済的・地理的格差について公平性・公正性への配慮をすることなどが盛り込まれた。また、調査書については指導要録との整合性を考慮しつつも、観点別学習状況の評価は直ちに設けないこととし、出願なども含めて完全に電子化することを目指すとした。

次に、議題 2 について資料 2 に基づいて大学入試センターの山本理事長より説明があった。

3 月 24 日にすでに公表されている令和 7 年度実施予定の大学入学共通テストにおける出題教科・科目について説明した。これまで 30 科目あったものを 21 科目にスリム化する予定である。「地歴公民」「数学」において大きな変更があり、新たに「情報」が新設される。CBT の実施については多くの課題があるため、PBT での実施とする。

次に、前回の両角委員の意見を踏まえて、島田委員と清水委員より第1回大学入学共通テストに関する評価が示された。

島田委員は「国語」について、試行調査と比べて大問数と試験時間に変更があったために、出題形式に関する情報が不明瞭であったこと、「実用的な文章」に関する説明が不足していたことが指摘された。個々の問題については、さらに洗練すべき点もあるものの、出題の意図が感じられると一定の評価を示した。ただし、これを維持するには作問の負担が大きいことが課題であるとし、新しい内容を加えるために大問数や試験時間の変更を検討してもよいのではないかと提言した。

清水委員は「数学」について、問題解決の過程を重視するという点を前面に出し、対話の利用や図を提示しない図形問題など出題意図を感じられるとの評価を示した。

ここまでの議題について質疑応答が行われ、委員の意見の概要は以下の通りである。

両角委員： 多面的評価について、格差への配慮は理念としてはわかるが、実際にはハードルが高い。同質な学生だけよりも、多様な学生がいることで、全体としてよりよい学びにつながるものであり、大学教育をよくするために必要だという積極的なメッセージがあるとよいのではないか。

末富委員： 審議のまとめをするためには、やはり入試センターとしての総括が求められる。特に、英語4技能についてどのように評価されたのか、振り返りを提言に盛り込んでほしい。

芝井委員： 国語については試験時間の適正性についてどう考えるか。数学については「太郎」「花子」などジェンダーバイアスが気になる。

→（島田委員）試験時間については危惧した点である。同じ時間内に新しい内容を盛り込んだことで、これまで問うていたことに影響があったのではないか。試験時間の変更は検討すべき。

→（清水委員）ジェンダー問題は重要であり、注視していくべき。

次に、議題3について資料3に基づいて川嶋委員より説明があった。

記述式問題の出題のあり方について、導入にあたって多くの問題点が生じたこと、大学の意見や実態も様々で国公立別でも状況が異なることについて整理した。その上で、個別入試において記述式出題を推進・支援し、また、入試だけでなく高校・大学における教育及びその連携を充実させるにはどうすべきか論点を整理した。

これについて意見交換が行われた。委員の意見の概要は以下のとおりである。

末富委員： 入試での記述式出題は大規模な私大で特に困難となっている。現在の入試は高校の学びに寄り添った形となっているが、大学での専門性を考慮した出題もあってもよいのではないか。また、大学は記述式試験の有無とその後の学生の状況について検証・

分析したデータを示すべき。文科省の初中局においては、高校での指導のあり方の実態調査で丁寧な説明を求める。

島田委員：「望ましい記述式に限界がある」という表現がわかりにくい。「条件付記述式」により問える能力は限定的であり「採点をめぐる制約がある中でこのような作問で限定的に記述力を測ってもコストに見合わない」と表現する方が現実に沿うのではないか。

芝井委員：「記述式で問うべき能力を問えるかどうかについて指摘」とあるが、「問えないのではないか」という表現の方が適切ではないか。

渡部委員：推薦やA0で小論文を課す例が少ないのは残念である。適性を判断するために志望動機などを事前に書かせることがあってもよいのではないか。

小林委員：記述式の問題点として、成績報告まで時間がかかるという点もあったのではないか。

芝井委員：国公私間の差について、受験生の立場としての実態が書いていない。併願の話など、日程の違いを含めた全体像が必要である。

柴田委員：国公立は分離分割方式を採用していることが最大の理由であり、背景に書き込むべきである。

渡部委員：私大は多様であり、記述式の義務化は困るものの、英語では「strongly recommended」というがやや強い文言で協力を求めているかどうか。

三島座長：益戸委員からも産学協議会報告書を踏まえた書面が提出されているので参照してもらいたい。

清水委員：受験者の全体像、集団として記述試験を通過するような緩やかな合意が必要。入試において記述を増やして欲しい。

渡部委員：作問ガイドラインの作成はいい案だと思う。その際、IELTSのような書かせる問題の例をガイドラインに含めてはどうか。

岡委員：高校における教育の充実の点で「大学入試における改善推進」はどのような改善を言っているのか。高校教育が大学入試にひきずられるように感じられるので、「高校と大学の垣根を低くして、定常時に大学が高校教育に積極的に参画するなど相互の理解を深め連携・協力していくことが重要である」という程度の表現がよい。

萩原委員：「入試で記述させる部分を増やす」という方向性に合意することは必要だと考える。

両角委員：高大連携で少し乖離があるように感じる。大学ではレポートなど論理的に書く能力が必要となっており、契約書などの実用的な文章は必要としていない。大学教育とつなぐ部分としての入試で問われているものが適切なのか。

穴戸委員：記述式に解答する場合、障害のあるお子さんができない場合もある。タブレットで打つのも可とするなど、考慮してもらいたい。

柴田委員：高大連携の取組の一例として、入試で出題した小論文を高校生に解説している。入学後も教材として使用しており、卒業生の評価はよい。

渡部委員：「穴埋め式」が記述式の一つとして扱われていたり、多肢選択の一部として扱われていたりする表現があるので、改善する方がよい。

島田委員：本来問うべき記述力・表現力の中身が明らかではない。端的に言うと論理的に述べる力であるので、「大学生に求められるのは論じる力だ」と書いてほしい。

小林委員：資料の1~3は事実の整理であり、4~5は問いかけで両論の意見が書かれている。これからこれをまとめていくのか、両論を書くのか。

→（川嶋委員）委員のご意見を伺いたいという趣旨で書いた。

小林委員：まとめるのであれば、国公立と私学は分けてまとめるべき。私大は一斉ではなく自主性に任せてほしい。

芝井委員：国公立の差について、まず私大を受けて次に国公立を受けるという構造になっている。私大は負荷をかけると敬遠されてしまうので、現在の構造では記述式を増やすのは不可能である。理念は大事だが現実も考慮してもらいたい。

岡委員：大学が求めている力は、これまでも述べている。受験生に対しては「新しい考え方をまとめる思考・判断力やその過程を表現する能力、自らの考えを立論しさらにその過程を表現する能力を様々な選抜を通じて丁寧に問う」としており、高校関係者には「根拠をもって問いに答えるレポート作成をする力などを含めて養成していただきたい」と述べている。

清水委員：記述式の中身は何か。フォームで分類はされているが、コンテンツ・カテゴリーとして何を書かせるのか。例えば、数学では定義、概念、例などがあってもよい。

島田委員：選抜区分によって分けなくても、入試全体としてどこかで記述式の出題をする努力をするという形なら合意ができるのではないか。

斎木委員：個別入試での記述式導入・推進に賛同する。大学入試の三原則は重要であり、できるだけ記述式を増やすという合意は必要であり、適切だと考える。

次回の第25回会議の予定については、日程調整後に決まり次第連絡することとなった。